

明清時代の禪に関する研究について

野口 善敬*

はじめに

明清時代の禪研究は、もともと唐宋期に比べて盛んだとは言い難い。宗学的な視野で見ると、禪宗五家のうち臨済宗と曹洞宗は元朝を経て命脈を保つものの、明清期はほぼ公案禪（看話禪）一色となり新味に乏しく、禪浄双修への傾倒も顕著であった。そのため、明清期の中国禪は研究者の興味を惹かなかつたのであろう。

結果的に、明清期全体を扱った禪宗史の単本の専著としては、中国では郭朋著『明清仏教』（福建人民出版社・1982年）があるものの、日本では本格的な研究書は出されていない。日本人の研究で、唐宋を含む通史の一部として近年、明清期に論究したものとしては、伊吹敦著『中国禪宗史』第12章第1節「明の成立と禪」・同第2節「文化の爛熟と禪」・第13章第1節「最後の光芒」・同第2節「禪の終焉」（『中国禪宗史』公益財団法人禪文化研究所、2021年）、及び同著「禪の終焉—明・清時代の禪—」（『禪の歴史』第六章・法蔵館・2001年）、拙稿「元明の仏教」（『新アジア仏教史』08中国Ⅲ 宋元明清「中国文化としての仏教」第二章・俊成出版社・2010年、中国語訳『中国文化中的仏教』法鼓文化・2015年）があり参考となる。

ただ、明清の中でも時期を明末清初に限って見るならば、歴史・文学などさまざまな分野で興味ある研究が出されてきた。漢民族から満州民族へと、激しい戦乱を経て王朝が明から清へと交替し、辮髪（辮髪）の強制という異民族文化への反撥もあって、数々の悲劇が起こった時代であり、旧王朝に忠義立てして殉死するか、新王朝に出仕して忸臣の汚名を着て命を長らえる

*花園大学文学部教授

か、剃髪出家して僧侶になるかといった選択肢は、人間の生き方として古今変わらぬ課題を私たちに突き付けている。仏教を含む明末清初期の有り様を描いた好著としては福本雅一『明末清初』（同朋舎・1984年）がある。

この明末清初期に限った禅宗の研究としては、中国における陳垣（1880～1971）の『清初僧諍記』（中華書局・1962年。訳注書＝拙訳『訳註・清初僧諍記－中国仏教の苦悩と士大夫たち』中国書店・1989年）・『明季滇黔佛教考』（中華書局・1962年）の二書と、「湯若望与木陳忞」「語録与順治宮廷」「順治皇帝出家」（何れも『陳垣學術論文集 第一集』中華書局・1980年、所収）という三本の論攷が内容密度の高さから言っても突出した業績であり、明末清初期の禅研究の金字塔と呼んでも良い存在である。日本では陳垣に先だって塚本善隆が「明・清政治の仏教去勢一特に乾隆帝の政策一」（『仏教文化研究』2・1952年＝『塚本善隆著作集』5・1975年）を出し、明末清初期の仏教研究の時代的な下限を示し、これを補完する形で塚本俊孝が雍正帝について「乾隆帝の教団肅正政策と雍正帝」（『仏教文化研究』11・1962年）など一連の論文を書いている¹。その他、『揀魔辨異録』や『御選語録』を著し、禅門の法王として振る舞った雍正帝の姿を描いた拙稿「雍正帝と仏教」（『町田三郎教授退官記念中国思想史論叢 下巻』中国書店・1995年）も参考となろう。

以下、この明末清初期を含む明清代の禅宗研究において、陳垣の歴史学的解析とは違う角度から大きな功績があった日本の研究者、長谷部幽蹊と荒木見悟の二人の存在を紹介し、更に近年における黄檗宗研究の活性化について概説したい。

一、長谷部幽蹊……明清仏教研究資料の整理

禅に限らず歴史的な文献研究においては、時代が下ると共に対象となる資料が増えるのは当然のことである。時間軸が長くなればなるほど生きてきた人間の累積数は増え続けるし、著述も増加の一途を辿る。もちろん、

易姓革命により王朝が次々に替わってきた中国では、大きな戦禍が度重なって多くの文物が失われてきたし、仏教に限ってみれば道教や儒教との対立による排仏も度々行われており、散逸した書物も数多い。ただ、時代が現代に近くなるほど残存する確率は高くなるし、明清期は出版活動が盛んだったことから、僧侶や居士の詩文集も数多く残されている。更に、仏教書については国家による「大蔵経」の出版があり、明代には官版の「大蔵経」が南蔵と北蔵の二度刻出されただけでなく、明末清初期には民間の手になる『嘉興大蔵経』や官版の『乾隆大蔵経』も加わる。また、総合的な類書として明代には『永楽大典』、清代には『四庫全書』が編纂されており、膨大な文献資料が残されている。「述べて作らず」の中国にあって、数量の多さが質の高さにそのまま直結するわけでは無かろうが、書冊が残されている以上、論文執筆に当たって一応の目配りが必要であり、明清代の研究における一つの大きなハードルとなっている。

昭和50年（1975）以前に纏まった禅宗資料として利用されていたものに『大日本統蔵経（卍統蔵経）』150冊があり、この中には二十種類以上の明清期の語録と十五種類以上の明清期編纂の燈史が入れている。但し、この『統蔵経』は収載されている書籍の底本が明示されておらず、その底本の一部が『蔵経書院本』として京都大学附属図書館に所蔵されていることから、その出所の片鱗を窺えるだけであった。

そんな中、民国57年（1968）～民国63年（1974）に脩訂中華大蔵経会が『嘉興大蔵経（徑山蔵）』を影印して、『修訂中華大蔵経』第二輯・160冊（この縮刷影印本が民国76年（1987）に新文豊出版公司から出版された『明版嘉興大蔵経』40冊である）として出版し、以後、『嘉興大蔵経』未収の禅籍も徐々に影印出版されるようになった。『嘉興大蔵経』では、明清期編纂の燈史の収載は十種類に満たないが、明清期の禅僧の語録は二百五十種類以上が収められており、大量の資料を容易に見ることができるようになったのである。また、寺志類では『中国仏寺史志彙刊』第一輯～第三輯・110冊（第一輯・第二輯・明文書局出版・1980年、第三輯・丹青図書公司・

1985年)・『中国仏寺志叢刊』初篇120冊、続編10冊(広陵書社出版・2006年)が出されるなど、補助的な資料も大量に出版された。

その膨大な仏教関係資料を精力的に整理し、研究者に便宜を図ったのが愛知学院大学の長谷部幽蹊であった。その成果は『明清仏教史研究序説』(新文豊出版公司・1979年)、『明清仏教研究資料(文献之部)』(私版・1987年)、『明清仏教研究資料(人名索引)』(私版・1989年)、『明清仏教研究資料(僧伝之部)』(黄檗山萬福寺文華殿・2008年)という形で出されている。私版が多いのは、明清仏教の研究者の少なさを反映しているが、綿密に整理された利用価値の高い資料索引である。これらの索引とは違う角度から資料を整理したものに拙稿「明末清代仏教の語録・著述とその法系」(『東洋古典学研究(広島大学)』第十集・2000年)がある。

また、長谷部は資料整理と平行して、『愛知学院大学論叢一般教育研究』や『禅研究所紀要』の誌面で数多くの論文を発表した。その一つの結実とも言うべき著書が『明清仏教教団史研究』(同朋舎出版・1993年)であり、数多くの資料を駆使しながら元末から清初に至る禅門の教団としての在り方と問題点を詳細に論じている。

資料の検索に限って言えば、現在では中華電子仏典協会のC B E T Aが『大正新脩大藏経』『大日本統藏経』『嘉興大藏経』などのテキストデータを一般に公開しており、寺志なども含めたデータの増補を年々続けていることから、長谷部による資料整理は過去のものとして、その価値に陰りがあることは否めない。だが、多くの別号を持つ僧侶の特定や、その所属する法系の割り出しについて、データ検索によって個別の資料を拾い集め、長谷部の索引と同様の情報を得るためには、かなりの時間と労力が必要である。その意味で、漢文の読解が苦手な日本の学者にとっては、いまだに高い利用価値が存在すると言えよう。

二、荒木見悟……思想史としての新たな視座

従来の仏教研究の枠を越え、「中国思想を形成するもの」（『仏教と儒教』の副題）という大きな観点から明清を含む禅の思想的な価値を唱えた研究者が九州大学の荒木見悟（1917～2017）である。彼は、仏教の華嚴と禅、儒教の朱子学と陽明学を通貫する要素として「本来性と現実性」という視座を提出し、従来「禅道変衰の代」（忽滑谷快天『禅学思想史』下巻）として低い評価を与えられていた明清仏教の再評価を、儒教と仏教にまたがる莫大な資料を利用して行なった。特に明代思想の研究における禅と陽明学の関係について、従来、主流であった陽明学は禅宗から生まれたとする立場を否定し、逆に陽明心学の出現が「明末仏教の復興をうながすきっかけとなった」（『仏教と陽明学』第九章 明末における仏教復興の原点・第三文明社・1979年、p.89）とした。荒木が歴史上の禅僧として最も評価したのは宋の大慧宗杲であり、看話禅により士大夫階級と密接な関係にあった大慧の禅を「最も本質的に国家・民族の構造改革を成し得るもの」（筑摩書房 禅の語録17『大慧書』・1969年、解説「四、公案禅の性格」、p.263）とし、参禅悟道による「禅心」の社会変革への威力を高く評価した。そして、その大慧流の対社会的な動きをした禅僧として明末万暦期に出現した紫栢真可（1543～1603）・雲棲株宏（1535～1615）・憨山徳清（1546～1623）の所謂「万暦の三高僧」を取り上げ、特に社会悪に対峙して獄死した紫栢真可を「出しゃばり禅」（日本の禅語録 第三巻『大応』「一、中国禅宗史の行くえ」講談社・1978年、p.23）として称讃した。この三人以外にも洞門の湛然円澄（1561～1626）・覚浪道盛（1592～1695）などの禅僧についても独自の角度からの研究を行い、論著で取り上げている。荒木の明末清初の禅に対する研究の基本的な立場は次の一文に余す所なく示されている。

もっとも重要なことは、個々の思想家が、どのような自覚と意図をもって

素材の取捨選択をし、そこにどのような自己定立の道を探り、衆生化（社会活動）の方途を見出したかということである。素材の抽出と、その古びた衣装の品定めだけでは、明末思想家の本心や実態を解明することにはならないのである。それは結局、彼らを唐宋仏学（もしくは儒学）の二番せんに終らせるだけだからである。

（『仏教と陽明学』「第九章 明末における仏教復興の原点」第三文明社 レグルス文庫・1979年、p.97）

荒木の著書のうち、『仏教と儒教』と『中国心学の鼓動と仏教』は国立中央研究院の廖肇亨によって中国語に訳されており（『仏教と儒教』聯経出版・2008年、『明末清初思想与仏教』聯経出版・2006年）、中国において荒木の近世中国思想史に関する功績は広く認知されている。2019年九月には復旦大学において「中国哲学的豊富性再現—荒木見悟与中日儒学国際研討会」が開催された。

尚、荒木の仏教研究の全体像については、拙稿「荒木見悟博士の仏教研究について」（『花園大学国際禅学研究所論叢』第16号・2021年＝廖肇亨訳「荒木見悟的仏教研究」・『當代』第227期／復刊第109期・2006年）で詳述している。また、その論著については拙稿「荒木見悟先生の思い出」附録の「著作・編著及び論文目録」（九州大学『中国哲学論集』第43号・2017年）を参照されたい。

三、近年における黄檗宗研究への動き

個別の事象を教団史として纏め上げた長谷部は別にして、歴史学者として仏教内部の事柄を非宗教的な側面から評価した陳垣と、思想史研究者として儒仏を通貫する論理に道筋を付けようとした荒木の説には、いささか疑問を感じる部分が存する。この疑問が筆者自身が明末清初期についての研究に携わり、関係する論文を書いてきた理由の一つである²。

陳垣は、『清初僧諍記』において主に木陳道忞・玉林通秀という二人の臨濟僧に焦点を当て、さまざまな諍^{あらそい}について論述を展開しているが、末尾の「記余」において「諍^{あらそ}われていたことは、臨濟と曹洞、天童（密雲円悟）と三峰（漢月法蔵）とを問わず、すべて門戸の勢力の諍であった（所諍、不論濟洞・天童三峰、皆為門戸勢力諍也）」（中華書局本・p.87）と認めており、明末清初期に密雲円悟や漢月法蔵が華々しく展開した禅門の宗旨論争の存在について否定的に扱っている。

一方、荒木見悟は、万曆三高僧を明末清初期の頂点と見なし、「万曆年間における仏教復興運動は、おそらく中国仏教史上、最後の光芒であった」（筑摩書房 禅の語録17『大慧書』・1969年、解説「五、後世への影響」、p.267）と断じ、明末清初期の宗旨論争に興味を示していない。

では何故これが問題かと言えば、この両者の考えは、清初、隠元隆琦によって日本に伝えられた臨濟宗黄檗派（現在の黄檗宗）の評価に直接関わってくるからである。隠元の禅は、明末清初期に展開した宗旨論争の中心的存在であった密雲円悟・費隠通容の棒喝宗旨を「臨濟正宗」として受け継いでおり、万曆年間の後に繰り広げられた宗旨論争を評価しないことは、隠元の禅の最も重要な要素を否定することにもなるのである。もとより、荒木に言わせれば、このような考え方自体が、特定仏教宗派の枠に捕らわれた見方だということになるわけだが、黄檗禅の影響は現在の日本禅宗の修行様式にも大きな影響を与えており、禅宗史研究の上で看過することができない大きな問題なのである。

日本においては黄檗宗関係の資料の整理・出版が以前から進んでおり、かつては平久保章によって編纂された『新纂校訂隠元全集』十卷（開明書院・1979年）・『新纂校訂木庵全集』七卷（開明書院・1992年）・『新纂校訂即非全集』（開明書院・1993年）が出版されたが、それに続いて近年、黄檗文化研究所より『高泉〔性激〕全集』4冊（黄檗山万福寺文華殿・2014年）が出版されている。また向井元升「知耻篇」・桂林崇琛「禅林執弊集」・無著道忠「黄檗外記」などを収めた木村得玄編『黄檗宗資料集成』第1巻

～第3巻（春秋社・2014～6年）も黄檗の研究に欠かせない資料集となっている。尚、黄檗宗に関わる江戸期の副次的資料として、京都妙心寺塔頭
の春光院・龍華院に所蔵されている無著道忠の大量の自筆本があるが、こ
れらの資料は花園大学国際禅学研究所のHP上で公開されている。

日本での黄檗関係の研究書としては、平久保章『隠元』（吉川弘文館 人
物叢書・1962年）以来、やはり宇治萬福寺の開山である隠元隆琦に関する
著述が多く、能仁晃道の『隠元禅師年譜』（禅文化研究所・1999年）や、
木村得玄の『隠元禅師年譜』（春秋社・2002年）・『隠元禅師と黄檗文化』（春
秋社・2011年）などがあり、近年には田中実マルコス『黄檗禅と浄土教—
萬福寺第四祖独湛の思想と行動』（宝蔵館・2014年）、野川博之『明末仏教
の江戸仏教に対する影響』（山喜房仏書林・2016年）、竹貫元勝『隠元と黄
檗宗の歴史』（法蔵館・2020年）などが出版されている。また、少し前の
書物であるが、大槻幹郎・加藤正俊・林雪光共著『黄檗文化人名辞典』（思
文閣・1988年）も研究に資する有益な辞典である。

現在の日本禅門の修行との関わりで書かれた論文としては、尾崎正善「警
策考」（『曹洞宗研究員研究紀要』第27号・1996年）・館隆志「江戸期の禅
林における面壁坐禅」（『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』第14回・
2013年）・拙稿「禅門の法式・法具における黄檗禅の影響」（日本学術叢
書30『十七世紀の東アジア文化交流——黄檗宗を中心に』・台湾大学出版
中心・2018年）などがあり、今後更に研究が進む分野だと考えられる。

おわりに

日本における明清仏教の研究者は極めて少ないが、近年、中国では明清
仏教への関心が高まっており、今後、国際的な繋がりを持ちつつ研究の拡
大がはかれることになろう。

海外の資料については、北京の国家図書館などの稀覯書も閲覧が可能と
なってきたし、『清初嶺南仏門史料叢刊』（広東旅遊出版社・2006～8年）・

『近世東亜仏教文献与研究叢刊』（仏光文化事業有限公司）・『中華仏寺志叢書』（新文豊出版・2013年）などの校点本も出され、明清期の僧侶の貴重な墨蹟も『明清近代高僧書法展』（財団法人何創時書法芸術文教基金会・1995年）・『歴代高僧書法選粹』（同前・2020年）などが出されて、目にすることが可能となった。台湾宜蘭県の仏光大学では世界各地にある明清仏教の稀覯書の複写による収集が進められており、今後、研究の一大拠点となることが期待されている。

日本との交流を積極的に行っている中国の研究者としては、『天間老人一独立性易全集』上下2冊（国立台湾大学・2015年）を編纂した中国文化大学の徐興慶、『忠義菩提：晚明清初空門遺民及其節義論述探析』（中央研究院中国文哲研究所・2013年）などの著述がある国立中央研究院の廖肇亨、『明代的仏教与社会』（北京大学出版社・2011年）などを出している成功大学の陳玉女などがおり、厦門大学の林観潮も『臨濟宗黃檗派与日本黄檗宗』（中国物資出版社・2013年）を始め黄檗に関する著論を多数出し続けている。また、彼らの下には次世代を担う若い研究者も育ちつつある。明清禅研究の未来に明るい兆しがあると言えようか。

【注】

1. 塚本俊孝の雍正帝に関する論文としては、これ以外に「雍正帝の仏教教団批判」（『印仏研究』7-1・1958年）、「雍正帝の儒仏道三教一体観」（『東洋史研究』18巻3号・1959年）、「雍正帝の念仏禅」（『印仏研究』8-1・1960年）、「雍正帝の仏教教団への訓誨」（『印仏研究』9-1、1961年）、「雍正・乾隆二帝の仏学」（『印仏研究』11-2・1963年）の五本がある。『岐阜大学研究報告（人文科学）』第14号（1965年）に載せられた彼の「洪武帝と仏・道二教」（昭和40年9月20日稿了）の論末の〔附記〕に拠れば、塚本氏は昭和40年（1965）12月21日に腎臓病のため逝去したとされる。雍正帝の研究を始めてから僅か七年後のことであり惜まれる。
2. 筆者の明末清初期に関する主な論文は次の通りである（本文中既出分を除く）。「明末虎丘派の源流—笑巖徳宝と幻有正伝—」（『九州大学哲学年報』42・1983年）、「明末の仏教居士黄端伯を巡って」（『九州大学哲学年報』43・